

学生相談における学業・進路の 相談内容の特徴に基づく支援のあり方

池田忠義¹⁾*, 吉武清實¹⁾, 高野明¹⁾, 佐藤静香¹⁾, 関谷佳代¹⁾

1) 東北大学高等教育開発推進センター

1. はじめに

学生相談における個別の相談においては、心理面や精神症状の苦しさが問題になるもののみならず、単位や履修に関する情報を求めるもの、対人関係や進路について悩んでいるものもあるなど、その相談内容は多岐に渡っている。このような相談内容の多様さや幅広さは、学生相談の大きな特徴の一つであり、「よろず相談」と言われるゆえんでもある。

しかし、この特徴は、「よろず相談」と表現されるにとどまりがちで、多様な相談内容全体を分析の対象とし、その分類や構造を明確にするための実証的研究は十分には進んではいない。学生期の中での相談内容の変化に関しては、鶴田¹⁾が、「学生生活サイクル」という概念を用いて論じており、大学期・大学院期の学年に注目すると、学年ごとに固有の心理的課題や特徴があり、それに対応する相談があることを指摘している。また、大学院生に焦点を当てた研究を通して、大学院生期と大学生期では相談内容が異なることが示されている^{2) 3) 4) 5) 6) 7)}。

また、教育機関は、教科を教える機関であるのみならず、青少年に対するヒューマンサービスを提供する機関である⁸⁾と考えれば、金沢⁹⁾が指摘しているように、学生相談機関はユーザーである来談者のニーズに応えるサービスを提供する必要がある。こうした立場に立つと、相談内容は、来談者の様々なニーズを反映していると捉えるべきものであり、相談内容の多様さや幅広さは、学生相談機関やその担当者の援助のあり方を規定する要因でもある。つまり、相談内容は、来

談者の援助ニーズの現れであり、それに応える支援を行うことが学生相談機関やその担当者の役割であると言える。

それゆえに、学生相談活動の特徴を明確にし、来談者のニーズに応じた支援を行うには、相談内容についての実証的研究が欠かせない。こうした目的の下、池田ら¹⁰⁾は、1年分のケースの相談内容についての質的分析を行い、相談内容の分類や構造を明確にし、それらに基づく支援のあり方について論じている。

一方、多様な相談内容の中で、学業や進路の相談に関する相談は高い割合を占め、大学生・大学院生の適応や発達の支援を考えると、学業や進路の問題は中心テーマになる。学生にとっては、学業や進路面での行き詰まりが心理的な問題に結びついていることが多く、逆に、心理面の相談の背景に学業や進路の問題があることは少なくない。田中¹¹⁾は、学業に関する問題について心的課題という観点から理解することの重要性を指摘し、7つの下位分類を作成している。また、吉良ら¹²⁾は、個別相談における学年ごとの問題内容についての研究の中で、修学領域や進路領域においても、学年ごとの推移が見られることを指摘している。このように、学業や進路に関する相談内容の特徴を明らかにすることは、来談者にとっての生活面・心理面の課題を明確にすることであり、学生相談担当者の支援のあり方を考える上で欠かせない。同時に、学業に関する相談内容には、大学の教育体制や学生支援のあり方についての示唆が多く含まれている。学業や進路に関する相談内容は、大学に対する来談者の援助

*) 連絡先：980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学高等教育開発推進センター（学生相談所）

ニーズを反映しており、そのニーズに基づいた支援のあり方を大学全体、学生相談組織、学生相談担当者の各レベルで検討することが重要である。

本論文においては、池田ら¹⁰⁾が行った研究のうち、学業や進路に関する相談に焦点を当て、個別の相談データを用いた質的分析を通して、学業や進路に関する相談内容の分類や構造を実証的に検討し、その結果に基づいた支援のあり方について検討することを目的とする。

2. 方法

前述のとおり、本論文では、池田ら¹⁰⁾が行った学生相談の相談内容全体の質的分析の研究のデータの一部を取り出し、さらに詳細に検討した。そのため、最初に、その手続きを示し、次に本研究の手続きを示す。

(1) 相談内容全体の分析方法

①フィールドの概要

研究のフィールドは、10学部、15大学院からなり、学生総数約1万8000人（大学生約1万1000人、大学院生約7000人）という総合大学の学生相談機関である。本大学は、建学以来、「研究第一」と「門戸開放」の理念を掲げており、研究志向が強く、学生については大学院生が多いことが大きな特徴である。

筆者らは、大学の全学向けの相談機関である学生相談所において、学生相談カウンセラーとして勤務している。本研究の対象となる相談援助活動(平成16年度)時においては、カウンセラーは、常勤の者が4名、非常勤の者が1名(週1.5時間)であった。

②調査の対象

調査対象は、平成16年度に筆者らの勤務する学生相談所に相談に訪れた大学生及び大学院生、その関係者(家族、教職員等)の相談記録データである。有効データ数は総数677であり、大学生及びその関係者(以下、「大学生」と記す)が485、大学院生及びその関係者(以下、「大学院生」と記す)が192であった。

③調査内容及び方法

各相談員の相談記録に基づき、各ケースの「相談内容」を作成し、集計した。「相談内容」は、初回時の主訴を基礎とし、その後の面接で取り上げられた内容をも含むものとした。

データは、KJ法により分類・図解・文章化した。KJ法は、川喜多¹³⁾¹⁴⁾が開発した分析法であり、多様な質的データの分類のみならず、探索的にデータの構造を把握できるという特徴がある。具体的な手続きとしては、相談内容をカードに書き出し、近い感じのするカード同士を集めてグループ化し、更にそれらをグループ化していく作業を繰り返しながら、カードを空間配置し、その関係性を表示して図解した(KJ法A型)。その上で、その図解に基づいた文章化を行い(KJ法B型)、これらの手続きを通して全体の構造の把握を目指した。

これまでの先行研究により、大学生と大学院生の相談内容は異なることが示されているため、大学生と大学院生を分けてそれぞれにデータの分析を行った。

(2) 本研究の分析対象及び調査内容・方法

上記の手続きにより分類したデータのうち、学業や進路に関するカテゴリに属する相談データ366件(大学生245、大学院生121)を本研究の分析対象とし、これらのデータについて、KJ法による図解と文章化を行った。

3. 結果

池田ら¹⁰⁾の「相談内容全体についての結果」をまず提示し、次に、本研究の分析の対象とした「学業・進路に関する相談内容についての結果」を示す。

(1) 相談内容全体の結果

①KJ法A型による図解

大学生の相談内容については、図1に示したとおりであり、(I)から(X)までの大カテゴリと(i)から(vii)までの中・小カテゴリがあった。

大学院生の相談内容については、図2に示したとおりであり、(I)から(IX)までの大カテゴリと(i)から(v)までの中・小カテゴリがあった。

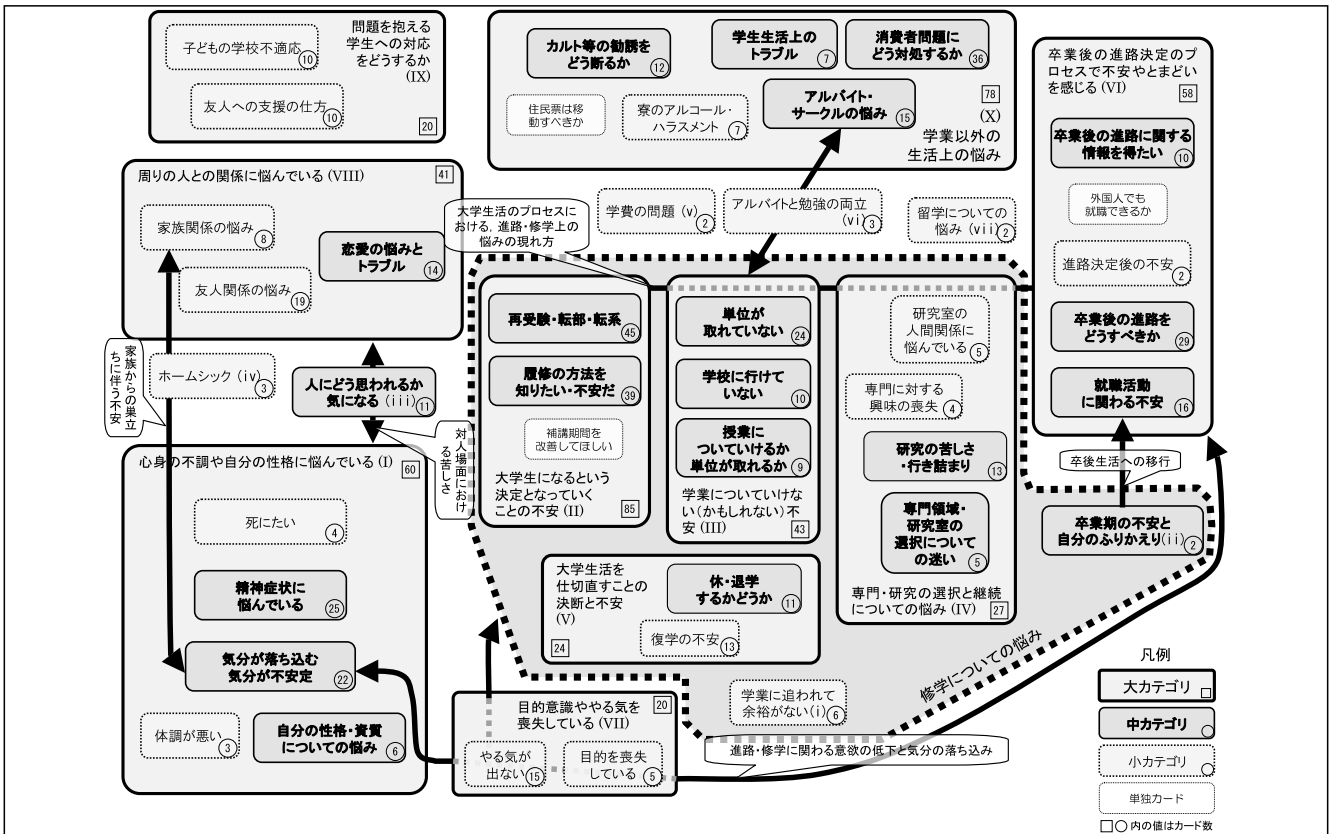


図1 大学生の相談内容

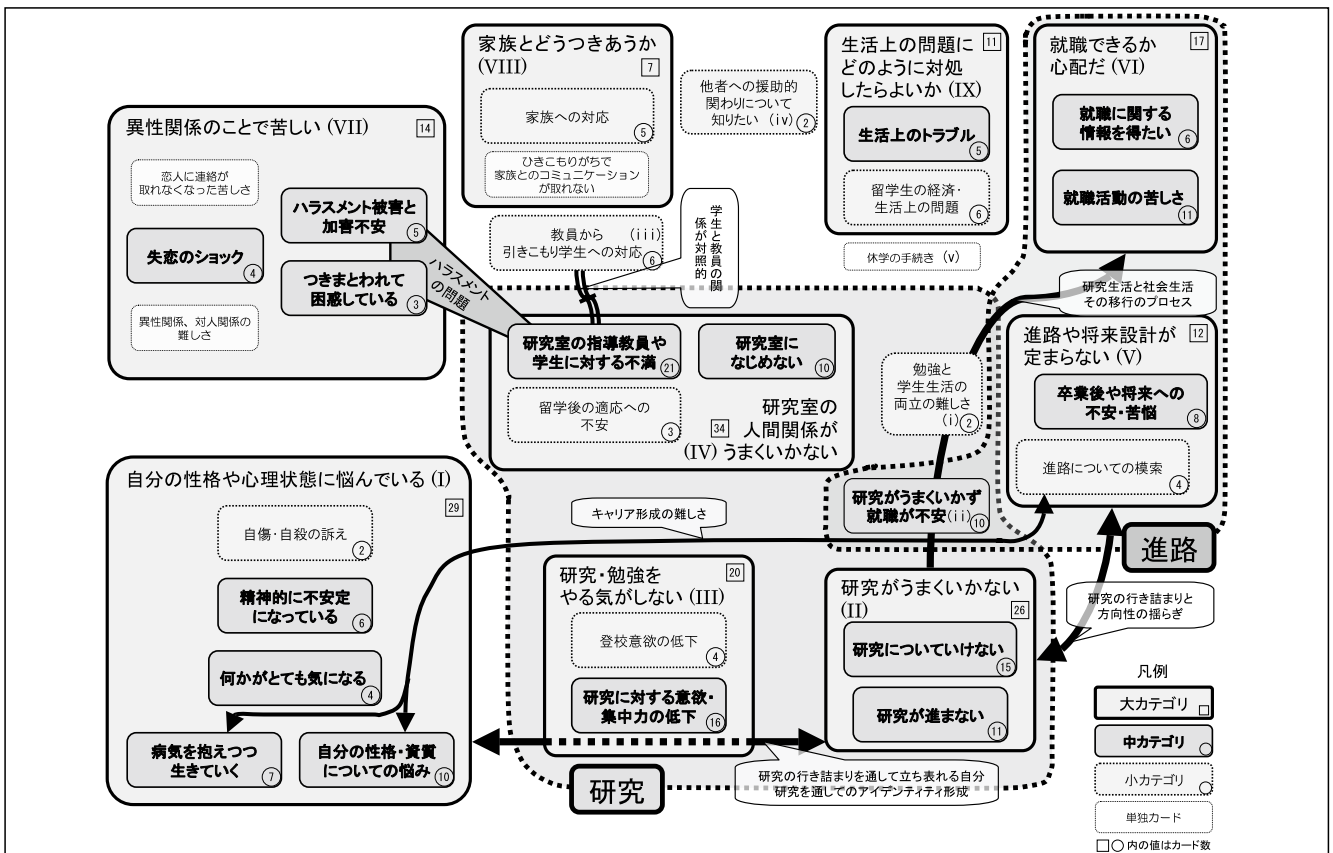


図2 大学院生の相談内容

②相談内容の各カテゴリの件数

大学生・大学院生それぞれの相談内容の各カテゴリの件数及び比率については、表1及び表2のとおりであった。

大学生は、修学に関する内容（カテゴリ（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）（Ⅴ）（ⅰ）（ⅱ））が合計38.5%と多く、その他に、学業以外の生活の悩み（カテゴリ（Ⅹ））が16.1%、心身・性格に関するもの（カテゴリ（Ⅰ））が12.4%、

進路に関する内容（カテゴリ（Ⅵ））が12.0%と続く。

大学院生は、研究に関する内容（カテゴリ（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）（ⅰ）（ⅱ））が合計47.8%と中心を占める。性格・心理に関する内容（カテゴリ（Ⅰ））は16.1%、進路に関する内容（カテゴリ（Ⅴ）（Ⅵ））は合計15.2%であり、いずれも大学生より多い。一方、生活上の問題（カテゴリ（Ⅸ））は5.7%と大学生に比べて少ない。

表1 大学生の相談内容の各カテゴリの件数

大カテゴリ	中・小カテゴリ	件数 (%)	計 (%)	
(Ⅰ) 心身の不調や自分の性格に悩んでいる	精神症状に悩んでいる	25 (5.2)	60 (12.4)	
	気分が落ち込む、気分が不安定	22 (4.5)		
	自分の性格・資質についての悩み	6 (1.2)		
	体調が悪い	3 (0.6)		
	死にたい	4 (0.8)		
(Ⅱ) 大学生になるという決定となっていく不安	再受験・転部・転系	45 (9.3)	85 (17.5)	
	履修の方法を知りたい、不安だ	39 (8.0)		
	補講期間を改善してほしい	1 (0.2)		
(Ⅲ) 学業についていけない(かもしれない)不安	単位が取れていない	24 (4.9)	43 (8.9)	
	学校に行けていない	10 (2.1)		
	授業についていけないか、単位が取れるか	9 (1.9)		
(Ⅳ) 専門・研究の選択と継続についての悩み	研究の苦しさ・行き詰まり	13 (2.7)	27 (5.6)	
	専門領域・研究室選択についての迷い	5 (1.0)		
	研究室の人間関係に悩んでいる	5 (1.0)		
	専門に対する興味の喪失	4 (0.8)		
(Ⅴ) 大学生生活を仕切りなおすことの決断と不安	休・退学するかどうか	11 (2.3)	24 (4.9)	
	復学の不安	13 (2.7)		
	(ⅰ) 学業に追われて余裕がない	6 (1.2)		
(ⅱ) 卒業期の不安と自己の振り返り	(ⅱ) 卒業期の不安と自己の振り返り	2 (0.4)	2 (0.4)	
	(ⅱ) 卒業期の不安と自己の振り返り	2 (0.4)	2 (0.4)	
(Ⅵ) 卒業後の進路決定のプロセスで不安や戸惑いを感じる	卒業後の進路に関する情報を得たい	10 (2.1)	58 (12.0)	
	進路決定後の不安	2 (0.4)		
	卒業後の進路をどうすべきか	29 (6.0)		
	就職活動に関わる不安	16 (3.3)		
	外国人でも就職できるか	1 (0.2)		
(Ⅶ) 目的意識ややる気を喪失している	やる気が出ない	15 (3.1)	20 (4.1)	
	目的を喪失している	5 (1.0)		
(Ⅷ) 周りの人との関係に悩んでいる	恋愛の悩みとトラブル	14 (2.9)	41 (8.5)	
	友人関係の悩み	19 (3.9)		
	家族関係の悩み	8 (1.6)		
	(ⅲ) 人からどう思われているか気になる	11 (2.3)		11 (2.3)
	(ⅳ) ホームシック	3 (0.6)		3 (0.6)
(Ⅸ) 問題を抱える学生への対応をどうするか	子ども学校不適應	10 (2.1)	20 (4.1)	
	友人への援助の仕方	10 (2.1)		
(Ⅹ) 学業以外の生活の悩み	カルト等の勧誘をどう断るか	12 (2.5)	78 (16.1)	
	学生生活上のトラブル	7 (1.4)		
	消費者問題にどう対応するか	36 (7.4)		
	アルバイト・サークルの悩み	15 (3.1)		
	寮のアルコール・ハラスメント	7 (1.4)		
	住民票は移動すべきか	1 (0.2)		
	(ⅴ) 学費の問題	2 (0.4)		2 (0.4)
	(ⅴ) アルバイトと勉強の両立	3 (0.6)		3 (0.6)
(ⅴ) 留学についての悩み	2 (0.4)	2 (0.4)		
		485 (100.0)	485 (100.0)	

(2) 学業・進路に関する相談内容についての結果

相談内容全体の分類枠のうち、学業や進路に関するものを取り出し、それらについて、KJ法による図解・文章化をし、更に、各分類の件数及び比率をまとめた。

学業・進路に関する相談に該当したのは、大学生については、修学に関する内容((カテゴリ(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)(Ⅴ)(ⅰ)(ⅱ))と進路に関する内容(カテゴリ(Ⅵ))であり、大学院生については、研究に関する内容(カ

テゴリ(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)(ⅰ)(ⅱ))と進路に関する内容(カテゴリ(Ⅴ)(Ⅵ))であった。

①KJ法A型による図解

大学生の学業・進路に関する相談内容については、図3のとおりであった。〈Ⅰ〉から〈Ⅴ〉の大カテゴリと〈ⅰ〉〈ⅱ〉の中・小カテゴリがあった。

大学院生の学業・進路に関する相談内容については、図4のとおりであった。〈Ⅰ〉から〈Ⅴ〉の大カ

表2 大学院生の相談内容の各カテゴリの件数

大カテゴリ	中・小カテゴリ	件数	(%)	計	(%)
(Ⅰ) 自分の性格や心理状態に悩んでいる	精神的に不安定になっている	6	(3.1)	31	(16.1)
	何かがとても気になる	6	(3.1)		
	病気を抱えつつ生きていく	7	(3.6)		
	自分の性格・資質についての悩み	10	(5.2)		
	自傷・自殺の訴え	2	(1.0)		
(Ⅱ) 研究がうまくいかない	研究についていけない	15	(7.8)	26	(13.5)
	研究が進まない	11	(5.7)		
(Ⅲ) 研究・勉強をやる気がしない	研究に対する意欲・集中力の低下	16	(8.3)	20	(10.4)
	登校意欲の低下	4	(2.1)		
(Ⅳ) 研究室の人間関係がうまくいかない	研究室の指導教員や学生に対する不満	21	(10.9)	34	(17.7)
	研究室になじめない	10	(5.2)		
	留学後の適応への不安	3	(1.6)		
(Ⅴ) 進路や将来設計が定まらない	卒業後や将来への不安・苦悩	8	(4.2)	12	(6.3)
	進路についての模索	4	(2.1)		
(Ⅵ) 就職できるか心配だ	就職に関する情報を得たい	6	(3.1)	17	(8.9)
	就職活動の難しさ	11	(5.7)		
(ⅰ) 勉強と学生生活の両立の難しさ	(ⅰ) 勉強と学生生活の両立の難しさ	2	(1.0)	2	(1.0)
	(ⅱ) 研究がうまくいかず就職が不安	10	(5.2)	10	(5.2)
(Ⅶ) 異性関係のことで苦しい	失恋のショック	4	(2.1)	14	(7.3)
	ハラスメント被害と加害不安	5	(2.6)		
	つきまとわれて困惑している	3	(1.6)		
	恋人に連絡が取れなくなった苦しさ	1	(0.5)		
	異性関係・対人関係の難しさ	1	(0.5)		
(Ⅷ) 家族とどう付き合うか	家族への対応	5	(2.6)	6	(3.1)
	ひきこもりがちで家族とのコミュニケーションがとれない	1	(0.5)		
	(ⅲ) 教員からひきこもり学生の対応	6	(3.1)		
	(ⅳ) 他者への援助的かかわりについて知りたい	2	(1.0)		
(Ⅸ) 生活上の問題にどのように対処したらよいか	生活上のトラブル	5	(2.6)	11	(5.7)
	留学生の経済・生活上の問題	6	(3.1)		
	(ⅴ) 休学の手続き	1	(0.5)		
		192	(100.0)	192	(100.0)

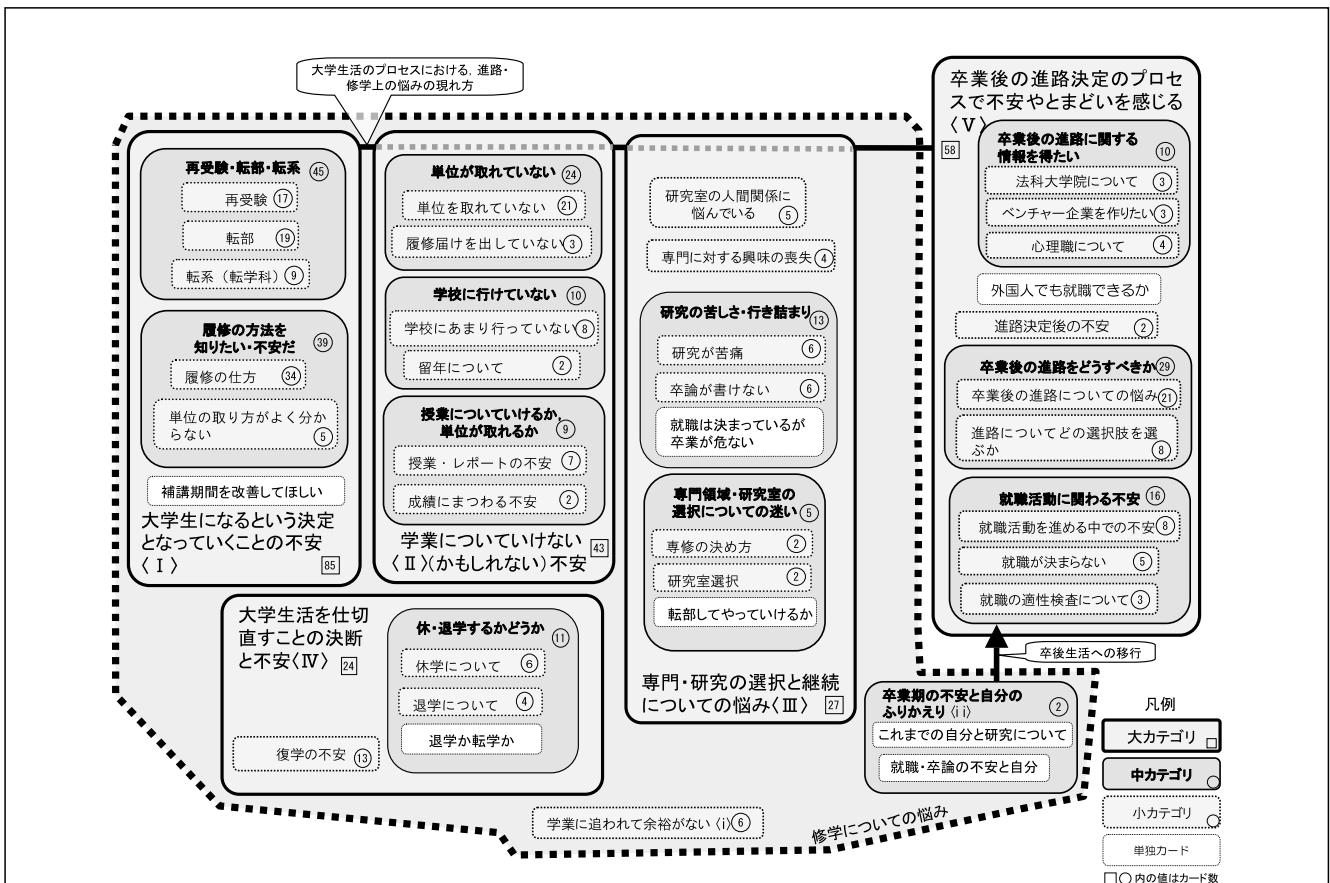


図3 大学生の学業・進路に関する相談内容

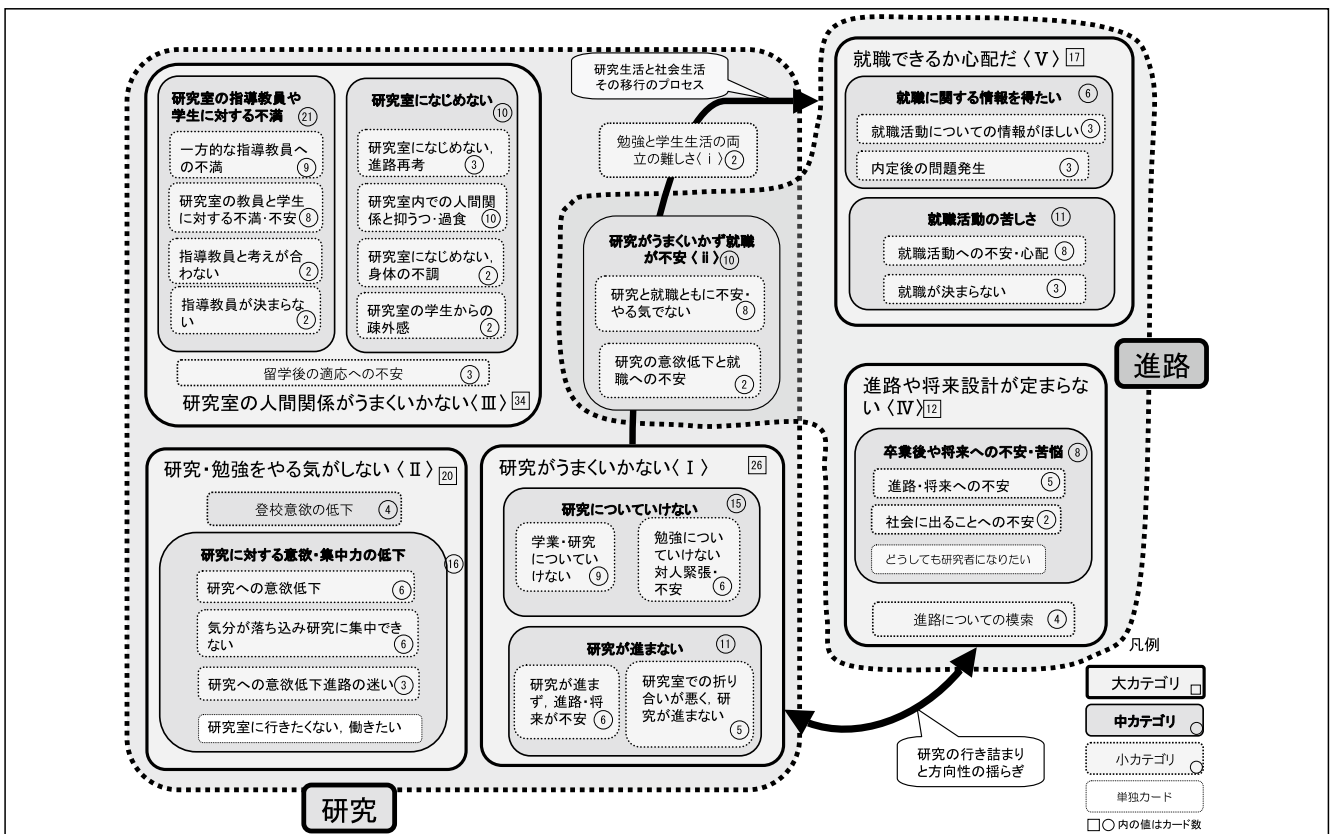


図4 大学院生の学業・進路に関する相談内容

テゴリと〈i〉〈ii〉の中・小カテゴリがあった。

②KJ法B型による文章化

1) 大学生の学業と進路に関する相談

【全体像】

学業に関する相談内容の主たるものとしては、「大学生になるという決定となっていくことの不安」〈I〉、「学業についていけない（かもしれない）不安」〈II〉、「専門・研究の選択と継続についての悩み」〈III〉、「大学生活を仕切りなおすことの決断と不安」〈IV〉がある。そして、その他に、「学業に追われて余裕がない」〈i〉、「卒業期の不安と自分の振り返り」〈ii〉がある。

「進路」に関する相談としては、「卒業後の進路決定のプロセスで不安やとまどいを感じる」内容としてまとめることができる。

【大学生になるという決定とその不安：カテゴリ〈I〉】

大学生になるという決定とその不安に関する相談としては、「再受験・転部・転系」、「履修の方法を知りたい・不安だ」とが中心である。前者は、自分の進んだ大学や学部、学系や学科から他へ移ることに関するものであり、後者は、履修の仕方や単位の取り方がよく分からないことで情報を欲しているものと不安を抱えているものとがある。

【学業についていけない（かもしれない）不安：カテゴリ〈II〉】

学業についていけない、あるいは、そうなるかもしれない不安として、「単位が取れていない」、「学校に行けていない」、「授業についていけるか、単位が取れるか」といったものがある。

単位が取れていない、学校に行けていないという相談をより具体的に見ると、単位が取れなかったり、履修届けを出していなかったりして困っている、また、学校自体に行かなくなっており、留年の心配も生じているというものである。これらは、既に学業についていけない状態にある中での悩みである。一方、そこまでの状態にはないが、授業についていけないことや単位を取れないことへの不安を感じているという内容があり、それは、授業・レポートに対する不安と、成績に関する不安からなっている。

【専門・研究の選択と継続についての悩み：カテゴリ〈III〉】

専門・研究に関する悩みは、研究に取り組むこと、専門領域や研究室を選択すること、研究室の人間関係に関することから構成される。

研究に取り組むことに関しては、「研究の苦しさ・行き詰まり」が中心となり、具体的には、研究自体が苦痛である、卒論が書けない、就職は決まっているが卒業が危ない、といったものがある。また、自分の選択した専門領域への興味を失ったというものもある。研究に取り組む前の段階での相談として、「専門領域・研究室の選択についての迷い」がある。具体的には、自分の研究での専門分野や研究室をどのように決めたらよいか、転部後に新しい専門分野でやっていけるか、といったものがある。更に、研究に取り組む環境としての研究室の中で、人間関係に悩んでいるという相談もある。

【大学生活を仕切り直すことの決断と不安：カテゴリ〈IV〉】

大学生活を仕切り直すことを巡る相談としては、休学・退学に関するもの、または転学ということを考えるものなどがある。また、休学を経て復学する際の不安に関する相談もある。

【学業生活の維持と仕上げ：カテゴリ〈i〉〈ii〉】

上記以外の学業に関する相談として、「学業に終わられて余裕がない」、「卒業期の不安と自分の振り返り」があり、学業生活の維持と仕上げに関わるものである。前者については、学業に取り組みつつも、生活面・心理面での余裕を持たずにいるというものであり、後者は、卒業が近くなって、学業と自分との関係について振り返っているものである。

【卒業後の進路決定のプロセスで不安やとまどいを感じる：カテゴリ〈V〉】

卒業後の進路に関する相談は、「卒業後の進路に関する情報を得たい」、「卒業後の進路をどうすべきか」、「就職活動に関わる不安」が中心であり、その他に、留学生の就職に関する事、進路決定後の不安に関する事がある。

進路に関する情報を求めているものとしては、心理職、法科大学院、ベンチャー企業に関するものであり、

進路の選択肢を具体的に考え、情報収集のための相談であると言える。卒業後の進路の決定に関する相談は、就職か進学も含めて進路の方向性が決まっていない悩みと、具体的な選択肢の中でどれを選ぶかという悩みとがある。また、就職活動に関わる不安としては、就職活動を進めている中で抱く不安や、就職が決まらない状態にあることの不安に関するものなどがある。

【修学・進路に関する悩みの現れ方：カテゴリ〈I〉〈II〉〈III〉〈V〉】

修学・進路に関する相談は、入学当初から前半の時期にかけて「大学生になるという決定となっていくことの不安」〈I〉、その後から2, 3年次にかけて「学業についていけない（かもしれない）不安」〈II〉、3, 4年次から卒業の時期にかけて「専門・研究の選択と継続についての悩み」〈III〉、「卒業後の進路決定のプロセスで不安や戸惑い」〈V〉が中心となる。このように、学年の進行に伴う相談内容の変化の流れを、「大学生生活のプロセスにおける、進路・修学上の悩みの現れ方」として表現することができる。

2) 大学院生の学業と進路に関する相談

【全体像】

学業に関する相談内容は、「研究」に関する相談と言えるものであり、主たるものとしては、「研究がうまくいかない」〈I〉、「研究・勉強をやる気がしない」〈II〉、「研究室の人間関係がうまくいかない」〈III〉がある。その他に、「勉強と学生生活の両立の難しさ」〈i〉、「研究がうまくいかず就職が不安」〈ii〉というものがあり、後者は、学業と進路の双方に関する内容のものである。

進路に関する相談内容は、「進路や将来設計が定まらない」〈IV〉と、「就職できるか心配だ」〈V〉からなる。

【研究がうまくいかない：カテゴリ〈I〉】

研究の遂行上の問題としては、研究についていけないという内容と、研究が進まないという内容がある。

前者については、学業や研究についていけない状態にあることが主たる悩みであるものと、それに加えて、対人不安や緊張といった問題も生じているものがある。後者については、研究が進まないことで、進

路や将来が不安になっているもの、研究が進まない背景に研究室での人間関係の悪さがあるものがある。

【研究・勉強をやる気がしない：カテゴリ〈II〉】

研究や勉強への意欲に関する相談としては、「研究に対する意欲・集中力の低下」と「登校意欲の低下」とがある。前者については、研究への意欲が低下していることが主たる悩みとなっているもの、気分の落ち込みがあり研究に集中できない状態になっているもの、研究への意欲低下に伴って自分の進路に迷いが生じているものなどがある。

【研究室の人間関係がうまくいかない：カテゴリ〈III〉】

研究室の人間関係に関する相談としては、「研究室の指導教員や学生に対する不満」、「研究室になじめない」、「留学後の適応への不安」がある。研究室構成メンバーに対する不満としては、一方的な指導教員への不満や指導教員との考え方の違い、教員・学生双方に対する不満などからなる。また、研究室になじめないという悩みは、研究室での人間関係で不適応感・疎外感を抱いているものと、それに伴って心身の不調や進路の迷いも生じているものがある。

【学業と現在・今後の生活：カテゴリ〈i〉〈ii〉】

学業や研究と自分の現在の生活や今後の進路に関するものとして、「勉強と学生生活の両立の難しさ」、「研究がうまくいかず就職が不安」とがある。後者については、研究・就職ともに不安になり、双方への意欲を失っているもの、研究への意欲が低下し、その結果として就職に対す不安も生じているものがある。

【進路や将来設計が定まらない：カテゴリ〈IV〉】

進路や将来設計に関する相談としては、「卒業後や将来への不安・苦悩」、「進路についての模索」がある。前者については、進路・将来をどのように決めるかということについての不安、大学を離れて社会に出ることへの不安などがある。

【就職できるか心配だ：カテゴリ〈V〉】

就職の心配に関する相談としては、「就職活動に関する情報を得たい」、「就職活動の苦しさ」とがある。前者は、就職活動中に情報がほしいというものと、内定後の問題に対する対処法について助言を求めているものからなる。後者は、就職活動中やその前の心配や不安と、就職が決まらない悩みとからなる。

【研究と進路・就職：カテゴリ〈I〉〈i〉〈ii〉〈IV〉〈V〉】 以外の生活や就職にも大きく影響を及ぼし、「勉強と
「研究がうまくいかない」〈I〉という悩みは、それ 学生生活の両立の難しさ」〈i〉、「研究がうまくいかず

表3 大学生の学業・進路に関する相談の各分類の件数

大分類	中分類	小分類	件数 (%)	計 (%)		
< I > 大学生になるとい う決定となっていく不安	再受験・転部・転系	再受験	17 (6.9)	85 (34.7)		
		転部	19 (7.8)			
		転系 (転学科)	9 (3.7)			
	履修の方法を知りたい, 不安だ	履修の仕方	34 (13.9)			
		単位の取り方がよく分からない	5 (2.0)			
		補講期間を改善してほしい	1 (0.4)			
	< II > 学業についていけない (かもしれない) 不安	単位が取れていない	単位を取れていない		21 (8.6)	43 (17.6)
			履修届けを出していない		3 (1.2)	
			学校に行けていない		10 (4.0)	
		学校にあまり行っていない	学校にあまり行っていない		8 (3.3)	
留年について			2 (0.8)			
授業についていけないか, 単位が取れるか			9 (3.7)			
授業・レポートの不安		授業・レポートの不安	7 (2.9)			
		成績にまつわる不安	2 (0.8)			
		< III > 専門・研究の選択と 継続についての悩み	研究の苦しさ・行き詰まり	研究が苦痛	6 (2.4)	
卒論が書けない				6 (2.4)		
就職は決まっているが卒業が危ない	1 (0.4)					
専門領域・研究室選択についての迷い	専修の決め方		2 (0.8)			
	研究室選択		2 (0.8)			
	転部してやっていけないか		1 (0.4)			
研究室の人間関係に悩んでいる	5 (2.0)					
専門に対する興味の喪失	4 (1.6)					
< IV > 大学生生活を仕切りなおす ことの決断と不安	休・退学するかどうか		休学について	6 (2.4)	24 (9.8)	
			退学について	4 (1.6)		
		退学か転学か	1 (0.4)			
	復学の不安	13 (5.3)				
	< i > 学業に追われて余裕がない	6 (2.4)	6 (2.4)			
	< ii > 卒業期の不安と自己の振り返り	2 (0.8)	2 (0.8)			
	< V > 卒業後の進路決定の プロセスで不安や 戸惑いを感じる	卒業後の進路に関する情報を得たい	これまでの自分と研究について	1 (0.4)		58 (23.7)
			就職・卒論の不安と自分	1 (0.4)		
			心理職について	4 (2.0)		
		法科大学院について	法科大学院について	3 (1.2)		
ベンチャー企業を作りたい			3 (1.2)			
進路決定後の不安			2 (0.8)			
卒業後の進路をどうすべきか		卒業後の進路についての悩み	21 (8.6)			
		進路についてどの選択肢を選ぶか	8 (3.3)			
		就職活動に関わる不安	16 (6.5)			
就職活動を進める中での不安		就職活動を進める中での不安	8 (3.3)			
	就職が決まらない	5 (2.0)				
	就職の適性検査について	3 (1.2)				
外国人でも就職できるか	1 (0.4)	1 (0.4)				
			245 (100.0)	245 (100.0)		

就職が不安」(ii) という悩みにもつながりやすい。こうした課題に取り組んでいくことが、研究生活から社会生活へと移行していくプロセスであると言える(〈I〉 - 〈ii〉 - 〈i〉 - 〈V〉)。

また、研究がうまくいくかどうかは、自分の進路や将来設計にも密接につながっており、研究の行き詰まりがその後の方向性の揺らぎに直結しやすい(〈I〉 - 〈IV〉)。

③相談内容の各カテゴリの件数

大学生・大学院生それぞれの学業・進路に関する相談内容の各分類の件数及び比率については、表3及び表4のとおりであった。

KJ法A式で図解した大カテゴリを大分類とし、その下位分類に当たる中・小カテゴリ及び単独カードを中分類、中分類の下位分類に当たるものを小分類とした。

大学生については、学業(修学)に関する相談内容の中の「大学生になるという決定となっていく不安」

表4 大学院生の学業・進路に関する相談の各分類の件数

大カテゴリ	中分類	件数 (%)	計 (%)	
	小分類			
〈I〉研究がうまくいかない	研究についていけない	15 (12.4)	26 (21.5)	
	学業・研究についていけない	9 (7.4)		
	勉強についていけない, 対人緊張・不安	6 (5.0)		
	研究が進まない	11 (9.1)		
	研究が進まず, 進路・将来が不安 研究室での折り合いが悪く, 研究が進まない	6 (5.0) 5 (4.1)		
〈II〉研究・勉強をやる気が しない	研究に対する意欲・集中力の低下	16 (13.2)	20 (16.5)	
	研究への意欲低下	6 (5.0)		
	気分が落ち込み, 研究に集中できない	6 (5.0)		
	研究の意欲低下, 進路の迷い	3 (2.5)		
	研究室に行きたくない, 働きたい	1 (0.8)		
登校意欲の低下	4 (3.3)			
〈III〉研究室の人間関係が うまくいかない	研究室の指導教員や学生に対する不満	21 (17.4)	34 (28.1)	
	一方的な指導教員への不満	9 (7.4)		
	研究室の教員と学生に対する不満・不安	8 (6.6)		
	指導教員と考えが合わない	2 (1.7)		
	指導教員が決まらない	2 (1.7)		
	研究室になじめない	10 (8.3)		
	研究室になじめない, 進路再考	3 (2.5)		
	研究室での人間関係と抑うつ・過食	3 (2.5)		
	研究室になじめない, 身体の不調	2 (1.7)		
	研究室の学生からの疎外感	2 (1.7)		
留学後の適応への不安	3 (2.5)			
〈IV〉進路や将来設計が 定まらない	卒業後や将来への不安・苦悩	8 (6.6)	12 (9.9)	
	進路将来への不安	5 (4.1)		
	社会に出ることへの不安	2 (1.7)		
	どうしても研究者になりたい	1 (0.8)		
	進路についての模索	4 (3.3)		
〈V〉就職できるか心配だ	就職に関する情報を得たい	6 (5.0)	17 (14.0)	
	就職活動についての情報がほしい	3 (2.5)		
	内定後の問題発生	3 (2.5)		
	就職活動の難しさ	11 (9.1)		
	就職活動への不安・心配	8 (6.6)		
	就職が決まらない	3 (2.5)		
	< i > 勉強と学生生活の両立の難しさ	2 (1.7)		2 (1.7)
	< ii > 研究がうまくいかず就職が不安	10 (8.3)		10 (8.3)
研究と就職ともに不安・やる気でない	8 (6.6)			
研究の意欲低下と就職への不安	2 (1.7)			
		121 (100.0)	121 (100.0)	

〈I〉が34.7%と多く、進路に関する相談〈V〉の中では、進路の決定に関するものと就職活動に関するものが中心となっている。

大学院生については、学業（研究）に関する相談内容の中の「研究室の人間関係がうまくいかない」〈Ⅲ〉が全体の28.1%と一番多く、「研究がうまくいかない」〈I〉が21.5%とこれに続く。また、進路に関する相談では、「就職できるか心配だ」〈V〉という内容が全体の14.0%と多い。

4. 考察

(1) 学生相談における学業・進路に関する相談内容の特徴

学業・進路に関する相談内容の特徴について、大学生と大学院生それぞれに検討する。

①大学生の学業・進路に関する相談：主体的な判断・対処スタイル作りのプロセスとそこでの悩み

大学生の学業・進路に関する相談内容には、学年の進行に伴う学業面・進路面の課題が明確に反映されている。大学入学後から卒業までの期間においては、(1) 入った大学・学部・専攻を続ける決意をすること、(2) 大学の講義・履修のシステムに慣れること、(3) 講義を受けて単位を履修すること、(4) 専門領域を決めて研究に取り組むこと、更に、(5) 卒業後の方向性を定めること、といったことが学業面・心理面の課題である。そして、これらの課題にうまく対処できない状況に直面したときに、学生は悩みや不安を抱くことになる。

学年に着目すれば、大学生は、新入期の初期適応に関しての支援を強く求めていると言える。具体的には、自分の進路選択に納得すること、初めて体験する大学の修学システムに慣れるための情報提供や心理面の支援を必要としている。また、入学から卒業のプロセスに共通しているのは、大学生には、課題への主体的取り組みが求められることである。自分の進んだ大学・学部・専攻を続ける決意したり、自分の専門領域を決めたりするためには、自身の興味・関心を踏まえ、自分が納得できる結論を出すことが必要であるし、学業や研究への意欲を持続するためには、内発的

な修学・研究意欲が必要になる。また、卒業後の進路の決定に際しては、大学進学時とは比較にならないほど広い選択の幅の中で、自分の進む方向や具体的な進路先を決めなければならない。

大学生は、入学から卒業に至る時間軸の中で、学業や進路の課題に取り組むことを通して、より主体的な判断や対処のスタイルを身につけていくと言え、そのプロセスでの行き詰まり状況の中で援助を求めて学生相談機関を利用すると考えられる。

②大学院生の学業・進路に関する相談：専門性を深めるプロセスとそこでの悩み

大学院生の学業・進路に関する相談内容は、「研究」という課題に関わるものがほとんどである。「研究」を巡る問題は、(1) 研究の遂行・成果、(2) 研究への意欲、(3) 研究に関わる人間関係、という3つの要素が中心となる。大学院生にとっての学業とは、「研究に取り組む、成果を上げること」であり、研究の成否は重要な関心事となる。そのため、研究面での行き詰まりや後れは、意欲や集中力の低下につながりやすく、心身面の不調や悩みに結びつくことも多い。同時に、研究の成否は、自分の能力への評価に強く影響するため、研究がうまくいかないという思いは、進路や将来設計の揺らぎ、就職への不安といった進路面の問題に直結しやすい。

また、研究に取り組む上では、研究室やゼミ等に所属し、そこで人間関係を持つことになり、その人間関係が研究の遂行に大きな影響を与えている。すなわち、指導教員や指導的立場の学生から指導を受けるという関係、先輩・同級生・後輩との仲間としての関係をどのように作り、維持していくかということが、研究という課題への取り組みの一部であると言える。こうした関係の中で、不満や不適応感が、研究の失敗や意欲の低下、心身の不調にもつながりやすく、指導を巡る関係の悪化がハラスメントという問題に至る場合もある。

大学院生は、研究上の課題や研究を巡る人間関係に対処することを通して、自身の専門性を深めており、そのプロセスでの悩みが大学院生の学業・進路に関する相談内容に反映されている。

(2) 学業・進路に関する相談への支援

ここでは、学業と進路に関する相談それぞれの特徴を踏まえた支援のあり方について検討する。

①学業に関する相談への支援

学業に関する相談への支援としては、「修学・研究の停滞や後れ」、それに伴う「意欲の低下や心身の不調」の双方に対応することが、大学生・大学院生に共通する点である。単位を取れていない、授業についていけないという状態にある者に対しては、個別指導や補習等によって理解度を上げる、研究面で行き詰まっている者に対しては、指導教員や研究室の学生から指導・助言等により研究の進展を促進する、といった現実的な対応が必要である。同時に、意欲の低下や心身の不調に対応するためには、心理面に焦点を当てた支援が欠かせない。現実面での行き詰まり状態が、本人の不安や焦りを引き起こし、更に学業に取り組めない状態になるという悪循環が生じていることが多いため、不安や焦りを和らげるような働き掛けが必要である。

これらに加えて、大学生に対しては、学業に関するシステムについての情報提供を充実させることが必要であり、新入期における初期適応の支援のためにはこのことが特に重要である。具体的には、再受験・転部・転系といった方向転換、休学や復学、退学という仕切り直しのための条件や手続き、講義や単位履修に関する仕組みといったことについての情報を正確かつ分かりやすく伝えることが求められる。

一方、大学院生に対しては、研究を巡る人間関係の維持や改善のための支援が必要である。具体的には、研究室の指導教員やその他のメンバーとの付き合い方について来談者と検討する中で、その対人関係の持ち方の幅を広げたり、場合によっては、研究室の関係者に直接働き掛けて関係の改善を図ったりすることが考えられる。来談者と研究室構成員との関係が悪化し、人権侵害に相当するような事態になることも考えられ、「ハラスメント」という観点からこうした事態に対応することが必要な場合もあり、それゆえに、そのためのシステムの整備・充実が求められる。

予防的観点からは、研究室スタッフに対して人間関係のマネジメントに関する研修を行い、教員と学生の

関係、学生間関係どのように作り、維持していくかということに関する支援を行うことも考えられる。

②進路に関する相談への支援

進路に関する相談内容を見ると、進路に関する情報を欲している、進路や将来設計が明確ではない、就職活動中に苦しさや不安を感じている、という内容が大学生にも大学院生にも共通している。すなわち、(1)進路選択のための情報提供、(2)進路や方向性の決定に際しての支援、(3)就職活動中の現実面・心理面の支援、が求められている。

これらを見ると、進路に関する相談への支援は、進路や将来の方向性について検討する段階のものと、実際の就職活動を行う段階でのものとがあると言える。前者については、具体的には、自分のキャリアプランやライフプランを考えるための指導や教育、進路選択を検討するための情報提供などがある。その中で、自分の興味・関心や能力、適性の把握、働くことや自分が取り組んでいる学業の意義について、吟味するような働き掛けが重要であると思われる。また、後者については、就職活動を行っている最中、あるいはその前の時点で、就職先に関する情報を提供したり、自己分析や面接への具体的な対応について助言・指導したりすることなどが中心となる。

(3) 現実面の支援と心理面の支援：支援者間の連携・協働の必要性

学業や進路に関する相談内容は、来談者が、学業・進路に関する現実的な課題にうまく対処できない状態にあることを反映しており、そのため、そうした行き詰まりを改善するための現実的な支援を行うことが必要である。同時に、現実的な行き詰まりが、心理面での不安定さや心身の不調につながっていることも少なくないため、心理面の支援も欠かせない。

現実的な支援としては、学業や進路に関する情報提供、学業や研究の理解・遂行のための指導などがあり、心理面の支援としては、学業や進路の行き詰まりに起因する不安や抑うつへの対応などがある。これらの支援は、学生相談担当者だけでは行い得ない。現実的な支援に関しては、教務担当者を始めとする事務職

員、キャリア支援センター等の就職担当の教職員、研究室のスタッフや学生がその中心的な役割を担い、心理面の支援を主に学生相談担当者が行うことになる。来談者に関わる人がそれぞれの立場で支援を行い、お互いに連携・協働して多重性の高い支援を行うことが必要であり、実効性のある支援体制を構築していくことが大学に求められていると言える。

5. おわりに

本論文では、学生相談の相談データに基づき、学業・進路に関する相談内容に焦点を当て、その分類や構造を明確にし、それらの相談に対する支援のあり方について検討した。

学業・進路に関する相談内容は、大学やその相談機関に向けられた来談者の援助ニーズであり、多くの学生のニーズを反映している部分が大きいため、大学がその教育・学生支援の体制について検討する材料とすべきものである。したがって、明確になった相談内容に基づいて、学生の支援体制を充実させるための具体的な方策を検討していくことが必要である。

今後は、学業や進路に関する相談とその支援のあり方についてより詳細に検討するために、事例に基づいた研究を行うこと、来談しない学生も含む学生全体の援助ニーズを把握することが課題となる。

<文献>

- 1) 鶴田和美. 学生生活サイクルとは. 鶴田和美編 学生のための心理相談-大学カウンセラーからのメッセージ. 培風館. 2001: 2-11
- 2) 森田美弥子. 院生の相談事例の特徴. 第29回全国学生相談研究会議報告書, 1996: 78-80
- 3) 早坂浩志. 社会化のエージェントとしての研究室. 第33回全国学生相談研究会議報告書, 2000: 10-13
- 4) 齋藤憲司・道又紀子. 大学院生の適応状況と心理的課題-進学経路の多様性と研究室の諸機能に注目して-. 学生相談研究, 2000; 21 (1): 16-25
- 5) 杉原保史. 学部生と比較した大学院生の相談の特徴. 第33回全国学生相談研究会議報告書, 2000: 6-10
- 6) 齋藤憲司. 大学院学生期の特徴. 鶴田和美編 学生のための心理相談-大学カウンセラーからのメッセージ-

培風館. 2001: 42-53

- 7) 峰松修. リスクを内蔵する大学院. 第36回全国学生相談研究会議報告書, 2003: 46-50
- 8) 石隈利紀. 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは. カウンセリング研究, 1996; 29: 226-239
- 9) 金沢吉展. 大学のカウンセリング・サービスに対する学生のニーズとその構造-上智大学新入生を対象としたニーズサーベイの結果から-. 学生相談研究, 1998; 19 (1): 33-44
- 10) 池田忠義・吉武清實・高野明・佐藤静香・関谷佳代. 学生相談における相談内容の特徴に基づく支援のあり方-相談内容の質的分析から-. 投稿中
- 11) 田中健夫. 学生相談における修学問題の下位分類-担当ケース(109例)を新提起課題の視点から分類する-. 九州大学学生生活・修学相談室紀要, 2001; 3: 15-28
- 12) 吉良安之・田中健夫・福留留美. 来談学生の問題内容から見た学生期の諸課題-学年ごとの分析から-. 九州大学学生生活・修学相談室紀要, 2004; 6: 35-47
- 13) 川喜多二郎. 発想法-創造性開発のために. 中央公論社: 1967
- 14) 川喜多二郎. 続・発想法-KJ法の展開と応用. 中央公論社: 1970